

木村財団 2023年度 看護に関する講演会 (WEB)

意思決定支援の本質に迫る～その人らしい生き方を支えるために看護は何ができるのか？
暮らしの中で療養する人を支える～がんと共に歩む人々の声を聴きながら～

認定 NPO 法人マギーズ東京 センター長 秋山正子

がん医療の進歩に伴い、がんは長期にわたり療養を要する疾患となってきた。治療という状態のみならず、社会復帰しながらも、再発の不安を抱えながら長期にわたってフォローアップを続けなければならない状態の人が、入院ではなく外来患者として病院に訪れている。

長らく訪問看護に取り組んで、ことに在宅ホスピスに力を入れてきたのだが、2006年頃より、亡くなる間際の方の依頼が多くなり、しかも、そのことを十分に受け入れられずに治療を続けてきたと理解している方が多く、本人のみならず家族のケアにも、身体面のみならず心理面・社会面を含んで、残された時間の短さの中でケアを提供することが多くなった。もう少し、早くから相談に乗れたら、在宅ケアへの選択が早期になされ「暮らしの中で療養する人・家族」という観点から本人・家族ともに最期の瞬間まで生き切ることができるように関わられるのではないかと思っていたところに出会ったのがイギリスで1996年から始まったマギーズセンターの活動だった。2008年11月の国際がん看護セミナーで初めてマギーズセンターのことを耳にして、これは是非日本にもと、現地にも出向き、その建築と環境のすばらしさのみならず、自分自身の力を取り戻せるように、まずはよく聴くところから始まるアプローチに目を見張った。

予約の必要がなく、いつ行っても専門職が、医療的知識を持った友人の様によく聞いてくれることで、考えが整理され、混乱していた自分自身に気づき、しっかりと物事を決定できる力を取り戻す。そのマギーズセンターの利用者である河野順さんにも同席してもらいながら「がんと共に歩む人々の声を聴きながら」ケアするものもケアされる循環が生まれていくマギーズ流サポートの一端をお示しした。

マギーズセンターの創設者は乳癌体験者のマギー・ケズウィック・ジェンクスさん。彼女が外来の待合廊下で感じた、自分を取り戻せる空間が欲しいと願った思いは、彼女の担当看護師であったローラリーさんと夫のジェンクスさんによって実現されていく。この自分を取り戻せる空間という事はどのような意味があるのか？看護の視点で考えるならば、バッドニュースを聞かされた時に貶められた自己に尊厳を再び取り戻せる空間とヒューマンサポートが本当に必要だという事であろう。人を管理するという観点ではなく目の前に迫る魔物に近い不安を、ともに考え対話をしながら、そこに立ち向かえる強さを、自分自身の中に見出せるかどうかという事ではないだろうか。まさにシェアドデザインメイキング(SDM)により意思決定をサポートするという事につながる。

マギーズ東京での実践事例を含めながら、当事者の声も聴きつつ、意思決定支援とは何かを共に考える機会としたい。

様々な方々の協力を得て2016年に豊洲にオープンして7年目を迎え、延べ4万人が訪れる場所となった。